

水稻新品種「チクゴニシキ」について

<sup>1)</sup>西山 壽・八木忠之・日高秀光・<sup>2)</sup>吉田浩一・轟 篤・  
<sup>3)</sup>小八重雅裕・<sup>3)</sup>黒木雄幸・<sup>3)</sup>本部裕朗

(宮崎県総合農業試験場・<sup>1)</sup>九州農業試験場・<sup>2)</sup>宮崎県えびの農業改良普及所・<sup>3)</sup>宮崎県農政水産部)

Hisashi NISHIYAMA, Tadashi YAGI, Hidemitsu HIDAKA, Kouichi YOSHIDA, Atsushi TODOROKI, Masahiro KOBAE, Yukou KUROGI, and Hiroaki HONBU : A New Rice Cultivar "Chikugonishiki"

水稻新品種「チクゴニシキ」は、1988年から福岡県において奨励品種に採用され普及に移された。ここに本品種の育成経過並びに特性概要を報告し、普及の参考に供したい。本品種の育成に関し、種々ご高配をいただいた関係県農業試験研究機関各位に深く謝意を表する。

1. 来歴及び育成経過

本品種は1977年宮崎県総合農業試験場において、「南海65号(ニシホマレ)」の穂もち耐病化を目標に「南海65号」を母、「ミナミニシキ」を父として交配を行い、世代促進、個体選抜、系統選抜を経て、1983年 F<sub>8</sub>より「南海94号」の系統名を付し、関係県に配布して、地方適応性を検討してきたもので、1988年5月「水稻農林294号・チクゴニシキ」と命名、登録された。

2. 特性の概要

1) 形態的特性 稈長は「ミナミニシキ」より2~3cm程度長く、穂長、穂数は同程度のやや短稈穂数型である。止葉は立ち、やや短芒が少程度にあり、稈先色は黄白で、粒着密度は中、脱粒性は中である。

玄米の粒形、粒大は中位で腹白、心白の発生が極少なく、「ミナミニシキ」に勝る良質である。搗精歩留は「ミナミニシキ」並みで、食味は「ミナミニシキ」並みかやや良い。

2) 生態的特性 出穂期、成熟期とも「ミナミニシキ」より1日程度遅い暖地では晩生の晩に属する粳種である。耐倒伏性は「ミナミニシキ」並みの極強である。収量性は「ミナミニシキ」にやや勝る。

いもち病抵抗性遺伝子型は Pi-a と推定され、葉いもちの抵抗性は「ミナミニシキ」よりやや強い中、穂いもちの抵抗性は「ミナミニシキ」よりやや弱いやや強である。白葉枯病抵抗性品種群は金南風群に属し、圃場抵抗性は「ミナミニシキ」より強く中位である。縞葉枯病には罹病性である。

3. 奨励品種採用理由

福岡県の「ミナミニシキ」は収量性が不十分で、品質も不安定であるため、作付面積が減少すると思われる。また、中生の晩の「ニシホマレ」は食味の評価が不十分のため、「ツクシホマレ」に置き換りつつあるが、収穫乾燥作業の面から晩生種の比率を高める必要がある。「チクゴニシキ」は「ミナミニシキ」と比較して、耐倒伏性

は同程度に強く、収量性はやや勝り、品質も優れ、食味は同程度かやや良く、いもち病抵抗性は同程度、白葉枯病抵抗性は強いことから「ミナミニシキ」に替わり普及するものと思われる。

4. 栽培上の注意

1) 葉いもち抵抗性は中位なので、適期防除に留意する。

2) 晩生のため年によっては登熟が不安定となることがあるので、健苗育成につとめ、移植時期が遅れないようにする。

3) 縞葉枯病には罹病性なので、適期防除に留意する。

第1表 チクゴニシキの特性概要

形質		品種名	
		チクゴニシキ	ミナミニシキ
早 晩 性 草 型	晩生の晩	晩生の晩	晩生の晩
	穂数型	穂数型	穂数型
出穂期(月・日)	9.7	9.6	
成熟期(月・日)	10.24	10.24	
稈 長(cm)	78	75	
穂 長(cm)	19.3	19.4	
穂 数(本/m <sup>2</sup> )	376	378	
芒の多少, 長 短	少・やや短	少・やや短	
稈 先 色	黄 白	黄 白	
脱 粒 性	中	やや易	
耐 倒 伏 性	極 強	極 強	
耐 病 性	葉 い も ち	中	中
	穂 い も ち	やや強	やや強
	白 葉 枯 病	中	やや弱
	縞 葉 枯 病	罹病性	罹病性
	イネわい化病	中	中
玄米重(kg/a)	54.5	53.4	
同上標準比率(%)	102	100	
玄米千粒重(g)	23.0	22.7	
玄米品質	中上(4.0)	中上(4.4)	
食 味	中上	中上	

注) 育成地における1981年~87年の標準栽培